

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13386

研究課題名（和文）18世紀ドイツにおける官房学の形成と人口論 自然・道徳・統治の統合

研究課題名（英文）German Cameralism and the Population Discourses in the eighteenth century

研究代表者

紫垣 聡 (Shigaki, Satoshi)

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・助教

研究者番号：90712745

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は18世紀ドイツにおいて成立した官房学に関して、その枢要な論点をなした人口論に着目し、官房学が国家統治の学として体系化される知的背景を調査した。ヨハン・ペーター・ズュースミルヒや重要な官房学者のテキスト群の分析を通して、従来の重商主義的な財政論ではなく、自然科学の知見に立脚した官房学の議論を明らかにした。そこには人口動態の法則性のような自然の秩序にもとづく統治の構想、いわば「計る統治」が官房学を特徴づける理念として表れていた。この成果から、官房学をドイツに閉じられた学問ではなく、18世紀ヨーロッパにおけるポリティカル・エコノミーの成立という枠組みにおいて捉える視点を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はこれまで重商主義的な財政政策を中心に論じられていた官房学の理解を広げ、合理的な思考と自然科学的アプローチを重視する総合的な統治の学として特徴づけた。これは18世紀後半のヨーロッパで広く発展していた政治経済学に連なるものであり、官房学を国際的に論じる視点を提供する。ズュースミルヒによって開拓された人口統計の理論と実践は、数量的なデータやその規則性を政策決定の根拠とする「計る統治」のコンセプトを官房学にもたらした。この統治論の特徴はこの時期のポリティカル・エコノミーの研究に貢献するだけでなく、現代における政治・社会と科学的知識との関係についての議論にも歴史的知見を加えることができる。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the population theory, a central issue in cameralism as it was established in 18th-century Germany, and investigates the intellectual background of how cameralism was systematized as a science of state governance. Through an analysis of the literatures by Johann Peter Süssmilch and other important cameralists as J.H.G. von Justi, the study reveals that the discussions in cameralism were based not only on traditional mercantilist fiscal theories but also on insights from natural sciences. This included a concept of governance grounded in natural order, such as the laws of population dynamics. From these findings, the study presents a perspective that situates cameralism not as a discipline confined to Germany but within the broader framework of the formation of political economy in 18th-century Europe.

研究分野：西洋史学

キーワード：官房学 人口思想 人口統計 ズュースミルヒ ポリツァイ 政治と科学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 科学的・客観的とされる知識や知識生産の方法にもとづいて統治を行うという考えは、近世ヨーロッパで生まれた。主権国家間の競争という国際環境のもと、17-18世紀のドイツでこうした統治の構想が論じられ、国力増強を図る学知「官房学 Kameralismus」が成立する。官房学は経済学や行政学といった近代社会科学の祖型とされたため、長いあいだ近代との関連・対比において評価されてきた。これに対し近年の研究は、官房学を近世に固有の知的営みとして捉え、その言説に自然科学、道徳哲学、工学技術などの多様な知見が含まれていた点を指摘する。しかしそれらの知見がどのように官房学の議論と構想に組み込まれていったのかは、これまで実証的に論じられていない。

(2) また、遅れてきた重商主義としての官房学はこれまで、英仏のレッセ・フェールと対置され「ドイツ特有の道」論に囚われてきた。しかしイギリスにおける政治算術やフランスのコンドルセによる社会数学などは、官房学と共通する要素を持つ。したがって18世紀における官房学の展開の研究には、国際的な視点からその特質の移転、影響、変容を論じることが求められる。

2. 研究の目的

(1) 官房学と自然科学との結びつきを検証するための具体的な論点として、人口論に着目する。官房学において人口は国力の基盤とされ、政治の対象として扱う考えが発達した。人口を正しく把握しようとする取り組みに焦点を当てることで、「科学的」知識が統治の技法へと媒介されるプロセスが浮かびあがる。官房学の理念や目的、政策を支えた知識と思考はどこから、どのように汲みあげられたのか。18世紀半ばの人口論を形成した自然科学の知見と思考様式を明らかにし、官房学が根ざした知の水脈を描き出す。

(2) 自然と人間の認識に関する知の枠組みの変化が、人口論を通じて統治の理想を特徴づけたことを明らかにし、官房学を「計る統治」の学として説明する。またそこから、官房学を18世紀ヨーロッパのポリティカル・エコノミーの枠組みにおいて把握することを目指す。

3. 研究の方法

(1) 人口論を支えた知識と思考の分析

人口の規模・変動・死亡率が知的関心の対象となったことと、統治の綱領・技術が人口をその相関物として発見したことは関連している。プロイセンの神学者ヨハン・ペーター・ズースミルヒ(1707-1767年)は多くの統計データを駆使し、計算にもとづいて人口動態の規則性を見出した。彼の人口論は官房学にどのような影響を与えたのか、またそれはどのような知識と思想に立脚していたのか。こうした問題を分析することで、官房学の知的背景を明らかにする。

(2) 官房学における「計る思考」の検証

18世紀ヨーロッパではさまざまな分野で数量化の試みが進展した。国家や社会・経済的な現象を数量的に把握しそのメカニズムを理解しようとする試みは、それらの現象を計算し操作することが可能な対象とする思想を生んだ。人口に着目することで、臣民の経済活動と生存を操作可能とする統治とその思考を官房学のテキスト群に探る。

4. 研究成果

(1) ズースミルヒの人口思想

J. P. ズースミルヒは『神の秩序 Die Göttliche Ordnung』(1741年)において、人間の出生、結婚、死亡には一定の法則性があることを明らかにした。ここに示された人口の摂理は官房学者にとって、統計という手法による人口のコントロールが政策的に可能であることを意味するものだった。官房学の人口政策に重要な論点と論拠を提供した人口秩序の発見は、どのような知的背景を持っていたのか。

本書の特徴は、ヨーロッパ各地の人口、出生、死亡、結婚に関する大量の資料と計算にもとづいて、婚姻当たりの出生率や出生者における男女比などに一定の秩序が存在することを示した点にある。また人口増加の障害となるものについて戦争や疫病などと並んで未婚者が多いことといった社会的要因を挙げながら、それらに対する政策提言はほとんど行っていない。国力の源泉である人口をいかに増やすかといった議論には触れず、人口そのもののふるまいにズースミルヒの関心は集中していた。

『神の秩序』の方法と目的は、イングランドの知的伝統に根ざしていた。方法的なモデルとなったのは、ジョン・グラントやウィリアム・ペティによって開拓された人口資料にもとづく社会・国力推計、すなわち政治算術である。ズースミルヒの研究は政治経済的な分析を主目的とするものではなかったが、ペティら王立協会のメンバーに共有された実験哲学の理念に支えられていた。それは観察された事実にもとづいて知識を生産することであり、人口動態のように実験による再現ができない場合には、数値による定量化が得られた知識の確からしさを担保した。この

哲学は、自然の摂理を解き明かすことで神の教えを理解しようとする自然神学に受け継がれ、その著作に触れたことがズースミルヒを人口秩序の解明に向かわせた。

(2) 官房学における人口論と人口政策

18世紀半ば、官房学において人口に関する議論は新たな段階を迎えた。それが介入主義的な人口政策論の登場である。従来から人口は国力の源泉として重視されていたが、人口増加の政策としては輸出産業の振興による国富の拡大や、国外からの移住の促進といったことが論じられていた。ズースミルヒによる人口秩序の発見を契機として、官房学では人口に直接働きかける政策が論じられるようになる。

官房学を体系化し盛期官房学を代表するヨハン・ハインリヒ・ゴットローブ・フォン・ユスティ（1717-1771年）も、やはり介入主義的な人口政策を提示した。1757年に発表した論文において彼は、若い男女を結婚へと促し、貞節と良俗を広め、結婚に関する訴訟を抑制するための法整備を訴えている。ユスティが結婚に直接介入する議論を展開した背景には、前年にズースミルヒとの間でおこった都市の死亡率に関する論争があったかもしれない。いずれにせよ1750年代以降、婚姻率や初婚年齢といった人口変動の諸要素を統治の対象とする直接的な政策が前面に出てくる。

ズースミルヒ自身もまた、直接的な人口政策を論じるようになっていった。1741年には人口の摂理を政治経済的な議論に適用することに慎重であったが、1761-62年に出版した『神の秩序』改訂版において彼は積極的な人口政策を展開する。すなわち適切な規模の人口を保持することは統治者の責務であり、そのために適齢期の男女や多子家庭への経済支援、結婚や相続に関する法改正、助産師の養成、年齢差のある結婚の規制などさまざまな施策を提案した。また経済政策に関しては工業よりも農業を重視し、輸出産業の利益に目を奪われて労働者を犠牲にすることは国を貧しくすることになると、人口学の視点から論じた。

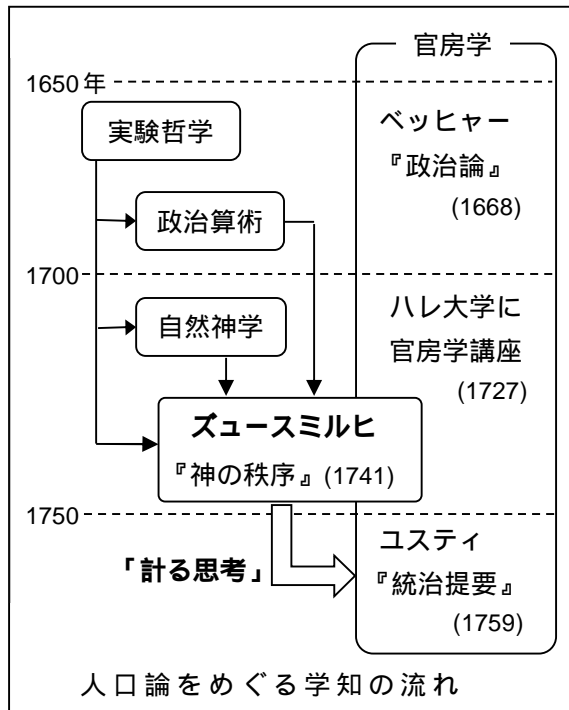
自然神学の徒であったズースミルヒがあるべき統治の議論へと「転向」した背景には、ベルリンの教区長、宗務局顧問、救貧委員としての経験と観察があった。1752年と1757年の論文において彼は、ベルリンにおける死亡率の上昇が、貧しい工場労働者の増加や彼らの生活環境を悪化させる物価の高騰といった社会的要因にあると指摘した。実践的な研究の成果から人口統計という手法が政治的、社会的状況の診断と改善に役立つとの手応えを得たことで、ズースミルヒは自身の人口理論を現実の国家統治へと応用することを決断したのである。

(3) 「計る統治」のポリティカル・エコノミー

ズースミルヒが示した人口秩序に刺激を受けた官房学の人口論の変化と、ズースミルヒ自身の政治経済論への接近は、互いに手を取り合って進んだ。ズースミルヒはベルリン科学アカデミーの会員でもあり、そこでの活動や数多くの思想家・哲学者との交流を通じてヨーロッパを広く覆う思想・知的状況からも影響を受けていた。ズースミルヒの政経論とユスティに代表される官房学を結びつけたのは、人口を媒介として現れてきた統治の様式だった。

それが「計る統治」である。この「計る」には二重の意味があり、ひとつは計測する、つまり国家の状態をさまざまなデータとして把握し利用する統治の様式およびその技術である。もうひとつは確立された法則や基準に対象をあてはめることで意図した効果を得られる、あるいは結果に関わらずそのような規範に従うことが適正であると想定する統治の様式である。こうした国家観はユスティの統治論にしばしば登場する「機械としての国家」のメタファーにも表れている。この機械を動かすのは自然の法則であり、統治者は理性の働きによってこの法則性を理解し適切な施策を取ることで人口を増やし、国家の富と力を高め、臣民の幸福という共通善へ至るとされた。

自然の法、自然の秩序にもとづく統治は、18世紀半ばのヨーロッパにおいて有力になりつつある政治秩序の理論だった。当時フランスで登場してきたフィジオクラシーの語も「自然の秩序による統治」を意味する。国家にとって重要な情報、すなわち人口などを定量的に把握し、分析し、異常を見つけ、修繕あるいは改善してつねに最適な状態にしておく。そのために自然の観察と理解から得られる知識が応用され、統治の技術として実践される。このような「計る統治」の構想に、ズースミルヒは人口秩序の発見によって独自の貢献をなした。ズースミルヒやユスティらの議論、とりわけ人口の統治は、官房学を古典的な重商主義と同一視する狭い枠組みでは捉えきれないものであり、18世紀ヨーロッパにおけるポリティカル・エコノミーの形成という文脈で理解されなければならない。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 紫垣聡	4. 巻 56
2. 論文標題 ズースミルヒ『神の秩序』と人口の統治	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 待兼山論叢（史学篇）	6. 最初と最後の頁 29-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 紫垣聡
2. 発表標題 近世ドイツ官房学における人口論 ズースミルヒ『神の秩序』を中心に
3. 学会等名 第70回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------